

歌集『あかね雲』より (四)

登美子

カナカナは今日という日の納め歌

短き命知るかに唄う

亡き友に土産に貰いし風鈴を手取れば

生きて話すかになる

木曾川に流して遠く行く灯籠を

父母や夫思いて眺む

楊貴妃とよき名の付けしこの花に

鋭きトゲの数多生えあり

蜘蛛の巣に掛かりし蟬を祓い来て

来世は人に生まれてこよと言う

逢う度に食療法等語り合ひし

友逝かれしも行く気おこらず

亡き友の畑貸られし若人に

余し苗を持ちきてやりぬ

手や足の傷見せ合いて

勲章と笑いしいで湯の夕暮れ思う

御堂横過ぐる電車の音高く

法話途切れて筆談なさる

風邪に臥すひとりの昼に気付きたり

我が家にありし諸々の音

闇の夜音に怯えて年々に

子供に還りいくらしわれは

齢重ね不十分なる雪吊りに

気を揉みおりしも春の日近く

湯活宿の格子天井の板木目

覚えてしまえり寝転びぬ間に

いくつもの病持てども畑を打つ

三十五斤の身いまだ爽やか

草原に落ちたる缶を拾い行く

われは今日一日ポランティアの日

拾い来し空き缶入れし大袋

トラックの台に山積みとなる

人間に明日と言う日の来る事は

大きな感激だと老いてなお思う

ちゃん付けで呼びくる人見れば

ゲートボールの激戦の相手

轟々と深夜に除雪する人の

顔は見えねど深くお辞儀す

露の筋よく取れたれば味も良し

大盛りにして皆の顔見る

逝きし友数多けれど

年毎に数補いて雛と飾れり

図書室に歌の本も読み飽きて

おとぼけマツチの絵本手にとる

一と瀬の家族への感謝の心こめ

お節の材料集めおり

雪吊りの心棒立て来し夫と子が

昼餉もそこに縄掛けに出ぬ

散水のノズルの先に虹立ちて

向日葵の色鮮やかに揺れる

紫式部良い名貰いし小さな花

実のなりたるを生け花にせん

年ごとに進みし弱眼補いし

眼鏡を求めてケースも買いぬ

